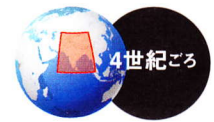
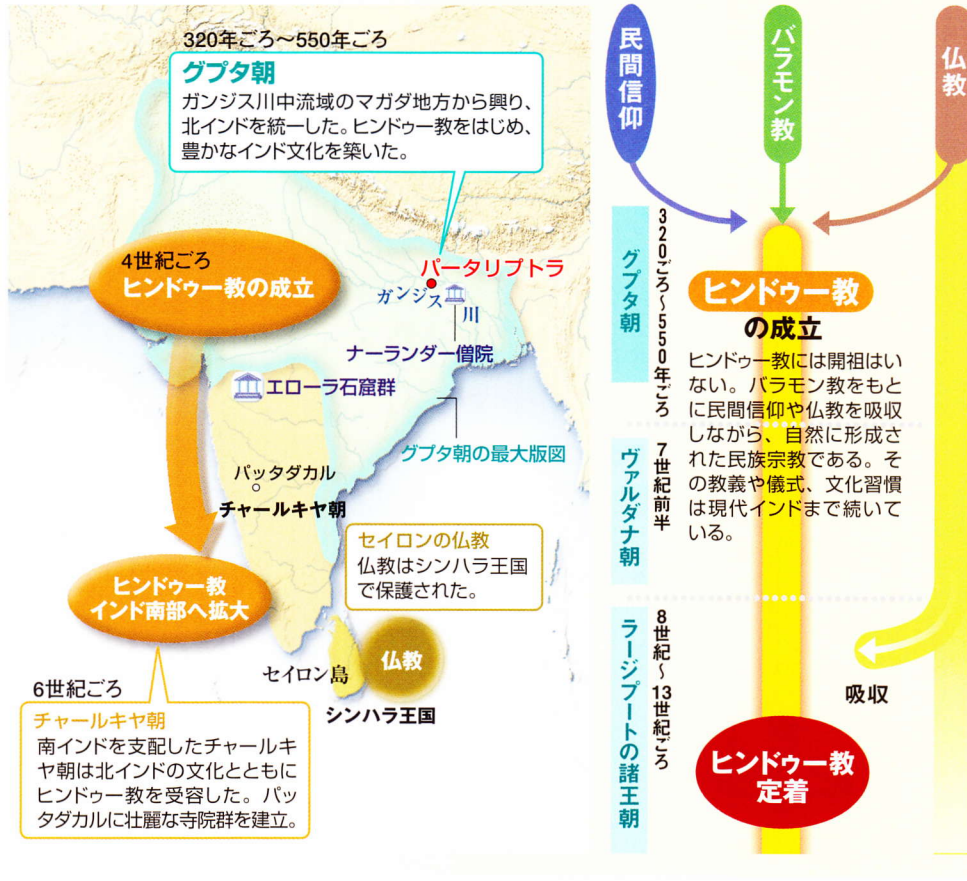


インドの民族宗教 ヒンドゥー教の誕生



4世紀ごろ

ヒンドゥー教の誕生と定着



現代インド社会に
影響を残す
ヒンドゥー教の誕生と
カースト制度の確立。

インド文化の黄金期に、 民衆に広まったヒンドゥー教

4世紀前半に誕生したグプタ朝は、第3代目の王チャンドラグプタ2世の時代に北インドの大部分を統一した。6世紀半ばに中央アジアの遊牧民エフタルの侵入によって衰退するまで、地方分権的な統治を続け、東西交易で繁栄した。

当時すでに仏教(P35参照)やジャイナ教の出現によって弱体化していたバラモン教(P34参照)が、民間信仰や仏教を取り込みながら変貌してヒンドゥー教へと発展したのがこの時代である。ヒンドゥー教は王族から民衆にまで広がり、主にヴィシュヌ又神とシヴァ神に信仰が集まった。

グプタ朝はまたインド文化の黄金期でもあった。ヒンドゥー教の聖典とも見なされる国民的2大叙事詩『マハーバータ』『ラーマーヤナ』や、生活規範を記した『マヌ法典』などを生み出したほか、天文学、数学、医学が発達した。とくに数学では、ゼロを用いた計算法が生まれ、インド数字や十進法とともに、のちにイスラーム世界を介してヨーロッパへも伝わった。

ラージプート時代に 確立したカースト制度

7世紀前半のヴァルダナ朝を最後に、北インドは小国が分立・抗争する時代に

入った。それぞれの小国を治める王たちはクシャトリア(王族)層の子孫を意味するラージプート(王の子)と名乗ることで、その王権を正当化したため、ラージプート時代とよばれる。

この王たちのもと、各地で直接農民を支配する領主層が生まれ、封建的な村落共同体が成立していった。また、住み着いたバラモン(聖職者)層によって教化されたりしながら、村落内では職業が分化、世襲化されて、カースト制度が確立した。現在、指定カースト(不可触民)とよばれる被差別民の階層は、このころから形成された。インド社会を特徴づけるヒンドゥー教とカースト制度は、この時代に定着したのである。

3つの宗教が共存する エローラ石窟群

7世紀に開窟されたエローラ石窟群には、仏教、ヒンドゥー教、ジャイナ教と3つの宗教の石窟寺院が南から北へ、インド社会の縮図のように並んで共存している。ここが、インドでは最期となる仏教の石窟寺院であった。

この寺院群のなかで、ヒンドゥー教のカイラサナータ寺院が最大の規模で、8～9世紀ごろに建造された。



Key Word

現在のインドの宗教

ヒンドゥー教はインド総人口の80%を超える信者を持ち、カースト制度とともにインドの社会全体に多大な影響を与えている。そこに、イスラーム教(13.4%)、キリスト教(2.3%)、シク教(1.9%)、仏教(0.8%)、ジャイナ教(0.4%)などの宗教が混在しているのが、インドの現状である。(各宗教人口の割合は2001年の統計)